

ラジオ放送
＜令和6年4月～6月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.447

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 夫ががんになりました page 1
富山県・富山教会 三浦徳代
- 神様を感じている瞬間（私からのメッセージ） page 5
滋賀県・大津教会 高阪有人
- アメリカのおにぎり（私からのメッセージ） page 10
大阪府・平野教会 宮下寿美
- 後ろへ下がるな（信心ライブ） page 14
- 生きる力の贈り物（私の本棚から） page 18
- 徳を積むということ（私の本棚から） page 22
- 木守りさま（もう一度聞きたいあの話） page 26
大阪府・天美教会 井坂春治
- 幼稚園に行きたくないの（もう一度聞きたいあの話） page 30
愛媛県・今治教会 塚本憲正

<金光教案内>

☞ 作家・かんべむさしさんによる金光教の紹介

- かんべむさしの金光教案内 6 第1回 page 35
- かんべむさしの金光教案内 6 第2回 page 39
- かんべむさしの金光教案内 6 第3回 page 43
- かんべむさしの金光教案内 6 第4回 page 47
- かんべむさしの金光教案内 6 第5回 page 51

《先生のおはなし》

「夫ががんになりました」

富山県・富山教会 三浦徳代

（ナレ）おはようございます。案内役の大林 誠（おおばやし まこと）です。今日は、金光教富山教会（とやま）の三浦徳代（みうらのりよ）さんのお話です。タイトルは、「夫ががんになりました」。

（三浦）令和3年の秋、夫が突然吐血をし、近くの病院に緊急入院をしました。「深刻な病気でなければいいな」と祈っていましたが、悪性の胃がんと診断され、大学病院で治療してもらうことになりました。詳しい検査を進めていくうちに、肝臓に転移していることが判明しまし

た。医師から、「手術はしないで、すぐに抗がん剤治療を始めます」と告げられ、頭が真っ白になり、言葉が出てきませんでした。インターネットで調べると、夫のは転移しやすいがんで、進行性が早く、5年生存率が十数パーセントと書かれていました。以前から何度も、「タバコをやめて」とお願いしていたのに、夫はずっと喫煙を続けていました。「あれほど言っていたのに」と、タバコをやめてくれなかった夫を責める気持ちも湧いてきました。でも、「医療は日進月歩だし、神様、金光様（こんこうさま）にお願いして、その十数パーセントに入れていただこう」と気持ち切り替え、1カ月の間に入院治療1回、通院治療2回を1クールとする、抗がん剤治療を受け始めました。

私は、夫ががんになって、それまで当たり前
と思っていたことが、決して当たり前ではない
ことにたくさん気づかされました。とりわけ、
体の働きの素晴らしさを改めて感じています。

例えば、「おなら」を出すのもすごいことで、
肛門に近づいてきたものが、固体か気体を瞬
時に判断して、おならをするかどうかを体が判
断するそうです。おならが出るのは恥ずかしい

なあとか、困るなあと思ったりしますが、そう
いう働きをきちんと整えてくださった上でのこ
となのです。しかし、そんな素晴らしい体を頂
いておりながら、そのことに気づかず、お礼を
言うどころか、病気になると不平に思っていま
うお互いではないかと思えます。夫のがんに直
面し、様々な情報に触れてつらくなることも多

いのですが、例えば、「睡眠はただ寝ているだ
けではなく、その間に脳では様々な情報を整理
したり、内臓ではいろいろな修復作業がなされ
ているそうだよ」などの話を夫としては、2人
で、「すごいね」と感動します。私たちの体の
中では、目には見えないけれども、たくさん
とてつもない働きが、いろいろとなされている
ことが分かってきました。

夫はがんという厳しい病を抱えましたが、そ
のおかげで、私たち夫婦は、体の中の病気を治
してくださる働きを、実感するようになりまし
た。また、体のことを知れば知るほど、体に愛
おしさを感じ、しみじみと感謝の思いが湧いて
きます。そして、夫も私も自分の体を大切に
心掛けるようになりました。

そしてまた、他の方々の体のことも大切にさせていたきたいと、より一層思うようになりました。夫が入院中は、コロナ禍で家族も面会を禁じられていましたが、夫は毎日、電話で体調や治療のことを話してくれました。

夫と同じ部屋にいる、50代半ばのがっちりした方は、2年前にがんが見つかり、手術を受けましたそうです。その後、順調に回復していました。が、肝臓と肺に転移しているのが見つかり、夫と同じような抗がん剤治療を受けるようになったとのことでした。

「これから、がんと共に生きる生活を続けていくんですね」と、顔を見合わせ、苦笑いしたそうです。そして、抗がん剤治療を受ける前に血液検査があり、白血球の数が足りないと治療

が延期されるのですが、その投薬スキップについて夫は、「いつも元気な心で、笑顔に溢れた生活をさせていただくと、免疫力が高まり、白血球も増えるそうですよ」と話し、その方が退院される時にも、「共に、いつも笑顔で生活させていいただきましょう」と確かめ合ったそうです。

前の教主金光様は、「だれでも、心の底から実意に、すべての人、すべてのものを愛し、大切にすると、神様のような心があれば、自然にいつでも笑顔というものが、にじみ出てくるものです」と、教えられています。

日々、体と神様のお働きにお礼を申し上げ、自然に笑顔が滲み出てくるような生活を心掛け、夫やがん治療をされている方々が、みな治

療を無事に受けられ、回復されますようにと祈らせていただいています。

いかがでしたか。三浦さんご夫婦は、病気をとおして、神様から命を頂いていることのありがたさを改めて確かめ合い、お礼を言いながら治療に努めておられます。

実は私、いつとき、三浦さんのご主人と一緒に仕事をしたことがあるんです。年間計画を立てる時に、ご主人は自分の予定表を私に見せながら、「ほら、来年の予定が12月まで埋まってきた。これを見ると、ありがたいなあと思うんだ。神様がここまで使ってやるぞと、命を保証してくださっているように思えてね」と話されたことがあります。

働くことができるのは神様のおかげを受けてこそ。これは決して当たり前ではないんですね。今日も元気に、神様に使っていただきましょう。



《私からのメッセージ》

「神様を感じている瞬間」

滋賀県・大津教会 高阪有人

おはようございます。私は、滋賀県大津市にあります、金光教大津教会おおつこうさかの高阪有人と申します。今日は、私たち家族の何でもない日常、いつもの朝の光景ではありますが、その中で、私が最近思うようになったことを、皆さんにご紹介したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

私には4人の子供がいます。小学校5年生のお兄ちゃん、2年生のお姉ちゃん、年中の男の子、2歳の女の子です。子どもたちのパワーはとってもすごいです。いつもわいわいがやが

や、大声で笑ったり、時にはけんかをしてみたいと、とても賑やかに暮らしています。みんな元気で何よりです。私たち夫婦は楽しくもありながら、子どもたちのパワーに圧倒される毎日です。そんな中でも、学校のある平日の朝は一段と慌ただしいのです。ご想像のとおり、まさに私も妻もてんてこ舞いです。

朝食の準備をする妻から、そろそろ子どもたちを起こしてと合図をもらって、私が子どもたちを起こしにいくのですが、寒い季節は特に、子どもたちはなかなか布団から出ようとしません。ですが、1人だけ頑張つてすぐに起きてくる子がいます。それは、上から2番目、小学2年生のお姉ちゃんです。

これからは、このお姉ちゃんを巡つてのお話

になります。ちょっとだけ私が困っていることがあるのです。お姉ちゃんは、布団から1番に出てくるように、とても頑張り屋さんで、優しく、素直で、弟、妹の面倒もよく見てあげるので、とても好かれています。そして、おっとり、マイペースなタイプです。

こう言ってみると、申し分のないように見えますが、先程も紹介したように、学校のある平日の慌ただしい朝には、そうも言ってもらえないのです。

1番に起きてきて、「顔を洗ってくる」と言い残し、洗面所に行ったかと思えば、なかなか帰ってきません。どうしたのかなと覗きに行かなければいけないくらいです。ようやく戻ってきて着替えを始めます。いつも上機嫌で、鼻歌

まじりで着替え始めますが、だんだん着替えより鼻歌がメインとなり、着替えはそこそこに、鼻歌だけでは収まらず、歌ったり、ちょっと踊ってみたりと、こちらが目を離すと、着替えは全然進んでいません。「歌はそれくらいいいから、早く着替えなさいよ」と何度も急かして、ようやく制服への着替えが完了します。

続いては朝食です。朝食も機嫌良く食べ、すっかり時間をかけて味わいながら、「このおかずおいしいね。この前、お出かけた時にもこういうの食べたね。そう言えば、学校でも給食にこんなおいしいおかずがあつて、それをお友達がね…」とおしゃべりが続いています。

この頃には、後から起きてきた男の子たちも食卓に着き、朝食をもりもり、ががつと食べ

て、さっさと食卓をあとにしていきます。それでもお姉ちゃんはずっと味わっています。

「そろそろ食べ終わらないと、学校に遅刻するよ」と、学校に行く時間が迫り、気になってきた私も妻も、だんだんとお姉ちゃんを急かす言葉の語気が強くなってきました。でもお姉ちゃんは、一応、急ぎはするのですが、いつの間にやらペースダウン。結んでもらった髪の毛を鏡でチェックしてみたり、ランドセルをごそごそしてみたりと、なかなか出発しそうにありません。「もう出発しないと、ほんとに遅刻しちゃうよ」と妻からの強めの最後の通告でようやく、「行ってきまーす」と家を出発したかと思えば、「忘れ物したー」と戻ってきて。まあこんなやりとりを毎日繰り返しているのです。

親としては、せっかくなので、遅刻をせずに学校に行ってほしいものですから、がみがみと急かしてしまいます。何とか、自分で時間を見ながら行動できるようになってほしいと思ってしまうのです。どう教えていったらいいものかと、夫婦であの手この手と考え、試しますが、一向に効果は出ていません。大したことではありませんが、ちょっとした困り事を抱えている毎朝なんです。

そんなある朝、「今日も、学校に遅刻しないように送り出さないとな」と思いながら、子どもたちを起こしていた時に、金光教の教えにある、「神様は無駄事はなされない」という言葉が、ふと思ひ浮かびました。単純に言い換えるのと、「起こってくることの全てには、自分にと

つての意味がある」ということです。

ただ、娘はどうしたら遅刻しないように時間を考えて準備できるだろうか、テキパキと行動できるようになってもらいたい、ということだけを考えていた私は、自分にとって、この娘との毎朝のやりとりに、どのような意味があるのかということについて、考えてみたこともありませんでした。こんな気づきを、「神様は無駄事はなされない」という教えをきっかけに得たのですが、毎朝のドタバタにどのような意味があるのか、考えてみても分かりそうにありません。とはいっても、神様が、私に用意してくださっている、毎朝のドタバタということならば、今はその意味が分からなくても、この先で振り返ってみた時に、分かる時が来るのかも

しれません。

とは言いながら、これまで同様、学校に遅れないよう、「もう時間だよ」「水筒持った」「体操服持った」と、慌ただしく娘を急きたてるのです。今も、この毎朝のやりとりの意味は分かっています。ですが、このドタバタは神様が用意されたと思うと、今日も、神様は私のそばで一緒にいてくれている、手を取り合って歩んでくれているということは、確かに感じることもできるのです。そして今日も一日、私たちをお守りくださいとお願いし、子どもたちの、「行つてきます」の声に手を振って見送ります。

慌ただしい今の世の中に忙しく生きるお互いですが、ちよつと自分の心を気に留めてみると、皆様の普段どおりの何気ない日常の中にも、神

様を感じている瞬間があるかもしれませんよ。



《私からのメッセージ》

「アメリカのおにぎり」

大阪府・平野教会 ひらの 宮下寿美 みやしたひさみ

20代後半の頃、私は、単身アメリカへ留学しました。金光教には、キリスト教の一つの宗派の要望を受けて、牧師を養成する神しん学校に、留学生を派遣する制度がありました。世界を見てみたいと思っていた私は、10年ぶりに募集があることを知り、飛びついたのです。

そうして、幸運にも留学生に選ばれた私は、1999年6月末に渡米しました。シカゴの中心地から南に11キロ。五大湖の一つ、ミシガン湖畔のハイドパークという地区に、その神学校がありました。学校周辺は、シカゴ大学のキャ

ンパスが広がり、歴史を感じる建物が立ち並び、緑が豊かで落ち着いた雰囲気です。

大学の寮の部屋には、ベッドと机、そしてクローゼットがありましたが、生活に必要な物は、現地でそろえなければならず、食事も自炊です。学費や生活費の管理のため、自分の銀行口座も開設しました。もちろん、授業の準備も必要です。キリスト教の教義や歴史、社会学や人文学、心理学、教育学、哲学などの科目を各学期ごとに3科目履修することになっていました。神学校というと宗教的なイメージがしますが、カリキュラムは、卒業に必要な単位を習得していく大学院と同じで、クラスはゼミ形式です。そうして、期待と緊張がいつぱいの初めてのアメリカ生活は、息もつけぬほどの忙しさで始まりま

した。

そんな中、私は、同じ寮に住むカナダ人の老夫婦と親しくなり、一緒に食事をしたり、勉強のことや身の回りの相談にも乗ってもらえるようになりました。とてもありがたいことでしたが、学校に日本人は私一人。日本語を話す機会ありません。今では、日本へ無料で電話を掛ける方法がありますが、当時、そんな便利な物はありません。英語漬けの毎日、仲良しの隣人が出来たことも、自分はとても恵まれていると分かっています。しかし、私のストレスは溜まっていきました。1人でおにぎりを食べていた時に、寂しさが溢れ出てきて、たまらなくなりました。普通のおにぎりでしたが、今までで一番しょっぱい寂しい味がしました。

私の渡米の少し前に、シカゴ市内に金光教の教会ができていました。それを知った私は、その教会に行きたくてたまらなくなり、その教会の先生に電話を掛け、行き方を教えてもらいました。寮から教会までは、バスと地下鉄を乗り継いで、1時間以上かかります。現地のバスや地下鉄に乗るのは初めてです。まるで小さな子どものように、事前に何度も行き方を調べました。見知らぬ土地でのひとり旅。私にとっては大冒険です。学校が休みの日曜日に行くことを決め、当日の朝を迎えました。もう一度確認しようと、旅行ガイドを開いてみると、なんということでしょう。教えてもらった地下鉄が、「日曜日運休」と書いてあるのです。「どうしよう」。しかし、どうしても参拝したい私

は、何とか迂回ルートを探して、家を出たのでした。最寄りの停留所から乗ったバスは、ミシガン湖のキラキラ輝く美しい湖面を横に見ながら、シカゴの摩天楼へと向かいます。とても美しい景色なのですが、その時の私には、それを楽しむ余裕などありません。自分の降りるバス停を逃さないように、必死でした。地下鉄に乗り込んでからは、犯罪に遭わないように、より緊張してガチガチです。そして、もう一度、バスに乗り換えて終点まで行くと、教会まであと徒歩10分。ただ、数日前に、この地域で発砲事件が起きたニュースを見たところだったので、ドキドキは収まりません。

人生で一番長い10分の距離を進み、疲れ果て、やっこの思いで教会に辿り着くと、先生が笑顔

で私を迎えてくれました。教会で神様に手を合わせていると、心が落ち着いて気持ちが軽くなっていました。初めての場所で初対面の先生です。なのに、私の緊張はすうっと解けていき、ストレスだらけだった気持ちが整えられ、日常の生活に戻る元気が生まれたのでした。教会から帰ると、それまでと同じように、私には毎週、発表やレポートなどの課題が出ます。日本語も話せず、ストレスを感じる毎日です。しかし、教会にお参りし、心を落ち着けられたという実感を得た私は、それまでと違い、心が驚くほど軽くなっていました。

神様に手を合わせて祈れる場所、安心できる場所があるのは、何より幸せなことです。私にとって教会は、まるで砂漠のオアシスのように、

ストレスだらけだった心に、潤いを与えてくれました。1人で食べるおにぎりも、心が潤うとおいしい普通の味に戻り、明日も頑張ろうと私に元気を与えてくれました。

そうして私は、毎月、時間を作ってシカゴ教会にお参りするようになり、留学期間を安心して過ごし、人生で掛け替えのない経験を積むことができました。

宗教というだけで敬遠されがちですが、困難な問題があふれている現代社会であればこそ、心がほっとできる場所を持つことは、元気な心で生きていくために、大切なことだと思うのです。

神様に心に向けて、祈りを捧げてみませんか。私がそうであったように、あなたの心の重みも

神様が一緒に抱えてくださり、心がふわっと軽くなってくると思いますよ。



《信心ライブ》

「後ろへ下がるな」

(ナレ) 今日は、大阪府・金光教堺^{さかい}教会の白神吉江^{かみよしえ}さんが、令和5年8月に金光教玉水^{たまみず}記念館で、お話しされたものをお聞きいただきます。

白神さんはこの時、働いているお店で、あるイベントを企画していました。しかし、いろいろな壁にぶつかり、うまく物事が進まなくて、もやもやとした気分にとらわれていたそうです。

(白神) 今日は、「おかげを頂く」ということについて、皆様と一緒に考えさせていたのだと思います。皆様は、「おかげ」という言葉

は聞かれたことがあると思いますが、皆様はどのようなおかげが頂きたいですか？ 例えば、

「豊かでありたい」ですとか、「幸せでありたい」「健康でありたい」、いろいろな望みがあると思います。生きていると、そういった欲がありますよね。それは生きる糧でもあります。おかげという言葉について調べてみると、「人や神様の助けなどによって受ける恩恵」とありました。

実は最近のことなんですけども、仕事から帰ってきて、家の駐車スペースに車を止めようとしたんです。フェンスに囲まれた場所なんですけど。ある一定の所まで下がって、本来ならそれで十分なんですけど、ちょうどその時、むちゃくちや考え事をしておりまして、考え事のか

たわら、駐車をより上手に見せようと思って、あと20センチほど下がろうとしたんですね。同時に全然違うことを考えているような状況です。考え事のほうで、ちよっと落ち込んでいたんで、気合を入れたんですね。「よっし！」。で、その気合を入れた時のシフトレバーが、リバースです。バックギアですね、後ろに下がるギアです。で、私、その状態で思いつきり、アクセルを踏んじやったんですね。これね、ニュースでよく見かけるあの状況ですよ。一瞬で大きく後ろに下がったので、バコッと何かにぶつかりました。まるで遊園地のアトラクションに乗ってるかのように、ドカーンと揺れて。「あー、やってしまった」と思って。とてもショックで、少しの間、動けませんでした。車の中で、

考え事のほうも駄目になるサインなのかなって。少しネガティブに考えてしまうんですね。それで、ご祈念をして、まず、お詫びをしました。「すいませんでした」と。考え事をしながら運転していたことや、自分の思い上がりに対して、お詫びをしました。恐る恐る車の外に出て、後ろを見に行きました。岩か何かに当たったかと思っていたら、そこまでボコボコじゃなかったんですね。「あれっ？ 何に当たったんだろう？」と思って、その後ろを見ると、少し怪我をした、太さ20センチくらいのカシの木がそこにありました。柔かい木に当たること、それほど大きなへコミにもならず、フェンスも突き破らず、岩とかにも当たらず、人にも当たらず。ましてやコンビニだったり、スーパーの

窓ガラスをぶち破ったりもせず。これだけでも
おかげだらけですよ。確実に自分の不注意で
す。でも起こしてしまったことは仕方がない。
でもそのようなことでも、大難を小難にまつり
かえてくださっている、大きなおかげですよ。
しかし、私は、その時はまだ、おかげを頂いた
なと思えていなくて、「申し訳ないな」の気持
ちでいっぱいでした。こんなに至らない自分を、
こんなにも、いつも、いつでも守ってください
ている。神様に対して、もう一度、自分をしっ
かりと持ち直させていただかないとな、と思
いました。

教会へ帰ってご祈念をして、思わせていた
いたことは、「後ろへ下がるな」でした。これ
は、自分にとっても都合のいい捉え方なんです

けど、考え事のほうも、車のほうも、後ろへ下
がるなど。前向きに進むことですね。いつも神
様は、助けながら導いてくださっています。それ
をそのままありがたく頂いて、ぶつけちゃった
けど体は無事で、大難は小難に変えてくださっ
たことも、おかげ。メッセージとして、そうい
うふうに受け取らせていただいたことも、おか
げ。そこを一つ信じて前向きに進ませていただ
こうと思いました。

信心や信仰の形は、十人いれば、十通りあり
ます。おかげの形も、十人いれば、十通りあり
ます。日々の生活の中で、おかげを探してい
きましょう。探してみれば、おかげだらけかもし
れません。生きていて起こること、全ての事柄
の側面は、おかげなんだろうなと思わしていた

だいております。一見するとつらい出来事。「な
んで自分はこんなについてないんだろう」「な
んで自分ばかりこんな目に遭うのか」。そう
思うような出来事。それらは何かを気づかせる
ため起こっている場合もあるかもしれません。
そこでもし気づけたら、オセロのように、つら
い出来事、それ自体がおかげだったんだと、ひ
っくり返りますよね。

いかがでしたか。「生きていて起こること、
全ての事柄の側面は、おかげなんだろうな」と
いう言葉。考えさせられます。

私の家の近所に、いわゆる、「開かずの踏切」
があります。その踏切に引つかかると、本当に
いつもイライラして、電車が通り過ぎるのを待

っていました。しかし、ある金光教の先生のお
話で受け止め方が変わったんです。それは、踏
切で、一生懸命に手を合わせて、どうぞ事故が
ありませんようにと、運転手さんや乗客の皆さ
んの無事を祈っている方のお話でした。

その話を聞いてからは、その踏切に引つかか
っても、「人のことを祈ることができるおかげ
を頂いた」と思えるようになったんです。イラ
イラがゼロになったわけではないですが、随分
と減りました。私にとっての大きなおかげです。

皆さんの回りにもたくさんあるおかげ、人そ
れぞれに与えられたおかげ、見つけることがで
きたら、お礼を言ってみましょう。「おかげさ
まで」。

《私の本棚から》

「生きる力の贈り物」

おはようございます。三重県、金光教松阪新町教会の水野照雄と申します。今日は、私の本棚から、1冊の本を紹介します。タイトルは、『生きる力の贈りもの』。サブタイトルに、「金光教前教主金光鑑太郎の言葉より」とあります。2001年、金光教徒社から出版された書籍です。

この金光鑑太郎という方は、1959年から1991年まで金光教の教主を勤めました。ちなみに、金光教では、教主のことを尊敬の念と親愛の情を込めて、「金光様」と呼ぶことが多いです。

また、金光教の本部には礼拝施設があつて、本部広前、あるいは単に、広前と言います。ここでは、いつでも自由に祈りを捧げることができます。そして、ここに行けば、誰でも直接、金光様に会つて話をするができます。その際、特別な手続きは必要ありません。

そのような金光様の言葉を、この本の中から、1つ紹介したいと思います。『世界中が大広前』というエピソードです。大広前とは、大きな広前。もともとの意味は、「神様や仏様の前」ということです。

物語は、新婚の女性が本部広前を訪れた場面から始まります。

*

新婚旅行のツアーで、サンフランシスコへ行

く予定が、旅行会社の都合で、そのツアーが二
カ月延期になった。このため妊娠三カ月という、
最も流産しやすい時期に旅行することになった
のを、周りの人の中には心配して、ツアーはや
めるように忠告する先輩もあった。「でも、ど
うしてもアメリカに行きたい。今、行かなけれ
ば、一生、行けないかもしれない」と思った新
妻は、ご本部へ参拝した。

ご神前で神様にお願いした後、金光様に、
「妊娠三カ月ということです。ありがとうございます
ございます。今度、サンフランシスコに旅行させ
ていただきます。どうぞ、無事、行って帰らせ
ていただきますように」とお願いした。すると、
金光様は、

「世界中が大広前である」

と言われ、それについていろいろとお話しくだ
さった。そして、お広前を指さされ、指を大き
く回しながら、「このお広前の中を、ぐるぐる
旅行するようなものであろうが」と言われた。
そして、にっこりと笑われて、

「旅行は楽しくないといけまい」
と、優しく言われた。

新妻は、何か目の前が開けた思いがした。「人
間は神のなかを分けて通るようなものじゃ」と
か、「この方の広前は世界中じゃ」といった教
祖様の御教えは耳にしていたが、その時初めて、
その御教えの心が少し分かるような気がした。
それまでは、神様が天地の間のいたるところ
にいて、お守りくださっているのだと思いが
ながらも、不安でいっぱいであった。ところが金光

様のお話で、「ここに神様が見ておられるので

はないか」と、背中をポンと叩かれたような気がした。それならぜひ、おかげを蒙りたいと願いを立て、先輩の忠告も肝に銘じながら、サンフランシスコへの旅行に出発した。

旅行中は、新幹線の中、飛行機の中といった具合に、事あるごとに手を合わせ、心の中で神様をお願いしながら旅行をした。そのおかげで、旅行中はつわりもなく、楽しかった。しかも、その時の子は、何の支障もなく安産であった。

「今から考えてみると、私はその時、金光様から、『船にも車にも積みぬ』ような宝物を頂いたのだということを、つくづく思わせられます。今後は、その宝物を少しでも磨かせてもらえるような人間に、お育ていただきたいと願ってお

ります」と振り返って話している。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

＊

いかがだったでしょうか。これ、「無理を押して旅行に行った」という話ではないと思うのです。むしろ、不安に凝り固まってしまった心が、金光様の言葉によって、柔らかく解きほぐされていった。そして、ここからのことを願うことができる、前向きな心へと導かれていった、という話だと思います。しかも、堅苦しい言葉でも、押し付けがましい態度でもなく、ユーモアさえ交えながら。こういう言葉で人は救われるのだと思います。

今、「宗教」というと、何だかいかがわしか

ったり、取っつきにくかったりと、あまり良くないイメージを持たれる方も少なくないでしょう。実際、宗教を名乗って社会に害悪をもたらす集団が問題になっていますし、世界に目を向ければ、いまだに宗教の名のもとに行われる争いごとが後を絶ちません。何でこんなことになるのか、残念に思いますし、絶望しそうになります。

でも、信仰を持つことは、人間にとって、とても大切なことだと、それでも私は思います。信仰は、この生きづらい世の中を、豊かに生き抜く力を与えてくれます。それは、金光教に限らずです。

もちろん、信仰を持たない生き方を否定するつもりはありません。ただ、「そんな生き方も

ありかな」ぐらいに思っていただけとうれしいです。

ここまでお聞きくださって、ありがとうございます。お礼申し上げます。そして、皆さんにとって、今日が心豊かな一日でありますように、心からお祈りします。

では、またいつの日か。

《私の本棚から》

「徳を積むということ」

おはようございます。東京都にあります金光教麻布教会の松本信吉まつもとしんきちです。

金光教に関する書物の中から、後世に残したいお話を紹介する『私の本棚から』。今日紹介するのは、岡山県にあります、金光教早島教会はやしまで長年奉仕されてきた玉井光雄先生のお話です。

皆さんは、「徳積とくづみ」という言葉を知っていますか？ 「徳積とくづみ」とは、「徳を積むこと」。
じゃあ、「徳とく」って何でしょう。「あの人は徳の高い人だ」なんて言ったりしますが、どこか
気高い雰囲気醸し出していたり、周りから素

敵だと思われる人っていますよね。一般的に、良い行いや立派な行いを積み重ねて、「徳」というのは積まれていきます。そして、徳を積んだ人の人生は、豊かになると言われます。

「あの人は運が良いなあ」と思われる人は、単にラッキーな人ではなく、自らが積んだ徳、もしくは、ご先祖様が積んだ徳によるものだとも考えられています。また、神仏のご加護を得るために、「徳」を積む場合もありますが、「神仏のご加護」と言われると、何か特別なことや厳しい修行をしなければ得られないように思っ
てしまいますよね。そんな事を考えていた時、
一冊の本に出会いました。

今朝は、平成9年に編集された、玉井光雄著『囲炉裏いろり―ぬくもりを集めて― 第二集』の中

から、『どうしたら徳が積めるか』というところを朗読したいと思います。

*

私が、徳、徳と申しますと、徳というのはどうすれば積めるんですか、と言われる。難しく考えて、特別なことをしないと、徳は受けられないと思っていますが、そんなことはない。毎日の生活、朝起きて働いて、自分の勤めを果たして、ご飯を食べて、夜になったら家族と話をして寝る。そういうような生活を順調に繰り返していくことが、徳を積むということであります。徳を積むために、自分の生活をほったらかして、何か特別なことをしないと、徳が積めないと思っている人がありますが、それは大きな間違いです。そうではなくて、徳を積もうと思

うたら、今、自分が生活をしている、その生活を本当にありがとうに思うて、自分に出来る勤めを、当たり前のことを一生懸命にしながら、日を立てていく。この繰り返し、ひとりでに徳になっていくわけです。ですから、特別なことをするのではなく、自分の勤めを大切に、自分の生活を、ありがとうに送らせていただくことで、ひとりで身につくのが、徳というものなのです。

もっと詳しく申しますと、人間は、二つ働かせなければならぬことがあります。一つは心の働きであり、もう一つは体の働きであります。こう言うと、また難しく受け取られますが、私どもは毎日、夕方になると、今晚は何のおかずにしようか、と思っているでしょう。この思う

ということとは心の働きです。今晚、何のおかずにしたら皆が喜んでくれるかとか、あるいは息子が風邪を引いているから、何にしたらよいとか、主人がくたびれているから、これをしたほうがよいとかいろいろと思う。その思いが心の働きです。そうして、よいことをしっかりと、本気で思っていれば、それがひとりでに神様に向いて、お願いに変わる。願いになるんです。そして、その願いによって体が動く。

例えば、今日は肉を食べさせようと思ったら、自分で足を運んで肉屋さんに行くでしょう。心が動けば、それが体の働きになるわけです。風邪を引いた息子が、今夜はおいしかったと言って喜んでくれる。そのことが自分の喜びになり、また自分の心に返ってくる。心に返ってきたら、

その喜びが元になって、ちょっと気をつけると喜んでくれるんだなと思って、次の日の心の働きを生み出していく。このように人間は心に思えて、思うたとおりに体が働いて、その結果が出て、ありがたいなあと喜んだら、その喜びが心に戻ってきて、次の心の働きの原動力になる。この繰り返しが人間の生活であり、自分の勤めを果たしていくということです。これが、徳を積むということなんです。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

*

いかがでしたか。麻布教会で奉仕している私の母は、現在82才になるんですが、教会に参拝された方、ご縁のあった方のお名前を、一人ひ

とりノートに書いて毎日神様に祈っています。

何百人の方のお名前を、毎日祈りながら、繰り返し繰り返し書く。そうすることで、その方のお子さんやお孫さんがお見えになって、新たなご縁を頂いたり、久しぶりに参拝された方が、自分の名前を覚えてくれていることに驚いて、喜ばれます。母の心と体が働き、皆に喜んでいただいているのです。

また私は、毎年、町の夜警に参加しています。

「火の用心しゃっしやりやしょう」と声を上げ、
拍子木^{ひょうしき}を鳴らします。火災予防を呼びかけ、

お年寄りが子どもたちに町の歴史を語るなど、長年受け継がれている催しです。私が参加するようになって30年あまりになりますが、楽しく参加しています。町のためにと、私の心と体が

自然に働いているのです。

徳を積むということは、特別な何かをする必要はなく、それぞれの持ち場、立ち場で、取り組む内容は違っても、自分の勤めを大切にし、誰かのことを思い、心と体を働かせ、日常生活に起きてくる全てのものを、一つひとつ気持ち良く受けていくことであり、日常生活を送る中で、どなたでもできることなのだと思います。

どうぞ皆さんの一日一日の生活が、徳積みになっていきますように、今日も元気な心でまいりましょう。

H A V E A N I C E D A Y !

《もう一度聞きたいあの話》

「木守りさま」

大阪府・天美教会 あまみ 井坂春治 いさかはるじ

（昭和53年8月31日放送）

「木守りさま」をご存じでしょうか。これは晩秋から初冬にかけて、農家の庭先の柿のこずえに1つ2つ取り残された、赤い柿の実をいうのです。竿が届かないので惜しいが取り残した、というのではなく、今年の豊作を感謝し、来年の実りを祈り、木の守りとして、1つでも2つでも、天地にお返ししよう。この柿の実がいつのほどこにか、「木守りさま」と呼ばれるようになったのです。

むさぼりやまぬ人の心に残された、つつまし

さ、日本の心とでもいいでしょうか。茶道の一杓しやくの湯を八分使い、元に戻す仕草も、このつつましさからきたのでしょうか。

飢きんの最中さなか、一升の粳米を枕にして死んでいった農夫の伝説を聞きます。このお米で、家族何日かは生きながらえたであろうに……。このお米は、来年、その一粒一粒が一粒万倍に、その翌年は、万粒万万倍に末広がり、多くの人の命の根となることを願ってのゆかしい心と思えます。

朱鷺とさという鳥の絶滅寸前という記事が新聞に出て、久しくなります。羽根ぶとんに良いということで、明治の獲り放題がたたって、日本のいたる所にいた、優雅な鶴に似た朱鷺も、幻の鳥にならんとしています。

カワウソは既に幻の獣となっています。絶滅いたしました。日本のありとある川に生息していましたが。明治から大正にかけて、多くの人の外套がいたうの襟巻にされてしまったのです。子どもの時、生きたカワウソを動物園で見ているだけに、言いようのない悲しみを覚えます。

「資源」という言葉は、「人間のために万物がある」という思い上がった言葉です。石油資源、水資源、命ある魚も魚資源、朱鷺も羽根ぶとん資源、カワウソも襟巻資源でしかなかったのでしょうか。人間中心の物の考え方は、物に對して、「利用」であり、もっともらしく言えば、「愛用」であり、「活用」であり、心ひけると、「節約」であつて、ありとしあるものに對するつつましさを、敬いを見失っています。そ

れは、「保護」という思い上がった言葉に、ひいては、「資源保護」という人間中心の言葉につながります。この独りよがりの思いは、やがて心の荒廃、よりて立つ天地の荒廃につながります。人間だけのための天地であつてはなりません。天地あつての人間という、つつましさを。この自覚が欲しいものです。

同様に、自分のための人であつてはなりません。人は、一人で生きられないもので、人間の宿命ともいえましょう。しかし、人は自分中心の思い上がった見方しかできません。悲しいことです。

家を相続された方が、親に隠居所も建て、お手伝いさんも付け、十分に小遣いも差し上げ、親の代以上に家を興して、さぞ親も喜んでくれ

ているであろうと自負し、得々としておられたのですが、案外に親が寂しそうにしているのに疑いを感じたのです。

物さえ十分に、お金は余分に、不自由さえさせねばそれでよしとしていた、自己本位の独りよがりな気づかれて、日に一度、「おはようさん」と、元気な顔を見せるようになられたということです。こんな簡単なことが、親にとって掛け替えのない喜びだったのです。親の心子知らずだったのですが、子の心親知らずもあるのです。立派な学習机、豊富な本、身ぎれいな服装、十分な小遣い、十分過ぎるほど十分過ぎて、「おかえり」と声を掛けてやる親の配慮がもう一つ望まれます。「おかえり」。この一声がなければ、着せ替え人形遊びのような、親中

心の身勝手、思い上がり、自己満足でしかありません。よりて立つ天地に対する、つつましさのなさ。人の命に対する、思いやりのなさ。共につつましさのなさと言えましょう。

つつましさとは、何でしょうか。これいいのかと自分に問いかけ、自分を見詰めることではないでしょうか。これでいいのだと割り切つてしまえば、実もふたありません。10を3で割れば、絶えず、1が残る。どこまでいってもすまない。このすまなさがつつましさであり、人の誠ではないでしょうか。「資源」を「お恵み」と知る人は、つつましさを知る人でしょう。こんな人ばかりの住む天地でありたいものです。「おはよう」「おかえり」。お互いに、我から我らへ、我らから我へ、呼び掛け合う地域社

会、そういった家庭でありたいものです。

これでいいと思えないすまなさ、つつましき。

この人の誠を、金光教の教祖様は、「これですんだと思いません」というお言葉をもつて、ご自分の到達された、「いよいよの自覚」を語っております。いつもご自分を見詰め、すまなさ、至らなさを追求されたように、私は、朝、目が覚めたら、「おはよう」、自分に声を掛けます。

「今日も健康かね」。これを怠ると、つつましき、すまなさを忘れるのです。「今日も生きてるね」、この問いかけが、愚かで、万事にずれどおしにずれている私の心に、「すみません」という殊勝^{しゅしょう}な心が湧いてきます。こんな心がどうして私の心から湧いてきたのか、自分のものとは思えない。向こうからきたのか、自分の

中からか。引き出されたのか、引き出すにしても、引き寄せるにしても、わが力でできたと思えない。そんな心が湧いてくるのです。

私はそこに、神とか、信心というものを感じるので。

《もう一度聞きたいあの話》

「幼稚園に行きたくないの」

愛媛県・今治教会 いまばり 塚本憲正 つかもと のりまさ

（平成3年1月9日放送）

末娘が、楽しみにしていた幼稚園に通い出して、2、3日経った時のことです。急に、「幼稚園に行きたくない」と言い出しました。妻は娘に、「楽しみにしていたのにどうして行かないの。楽しいから行きましょう。みんな行っているでしょう」となだめすかして、子どもを幼稚園の教室の中まで連れていき、先生に事情をお話し、よくお願いして帰りました。その時先生は、「幼稚園では、みんなとよく遊んでいますよ。どうしてでしょうね」と、おっしゃいま

した。それから、幼稚園に連れていくと、入口の所でぐずぐずして中に入っていかず、先生が迎えに来てくれると、渋々ながらやつと入っていくという日が続きました。

そうしたある日、また、幼稚園に行きたくないといって、ダダをこね始めました。妻がいろいろ説得しますが、行こうとしません。そこで、思いあまって私のところに連れてきました。私も、このまま娘の登園拒否が続く、それがずるづる続いて、登校拒否にでもなつては大変だと心配です。そこで、なだめすかし、いろいろ説得してみるのが、行こうと言いません。泣きながら自分の部屋に逃げ込んでしましました。

こうした時、じつと辛抱強く、訳を聞いてや

ったり、娘が幼稚園に行つてくれますようにとお祈りすればいいのですが、どこの子も登園しているのに、あんたはどうして行かないのか、落ちこぼれになってしまふぞと責めたり、「行きたくないのなら行かなくてもよろしい。その代わり、途中から行きたいと言つても行かせないが、その覚悟があるんだな」と言つて、威嚇したりして、いよいよ事情を悪くするものです。私も、どうしても娘が言うことを聞かないので、部屋まで行つて、そうした責める言葉や威嚇、脅迫まがいの言葉を言いそうになりました。しかし、その時、瞬時に思つたのは、もしそういうことを言つて、娘が、「それでいいよ。幼稚園には絶対行かないから」と言い、意地になつてそれを守り続けると、今度は、親のほうから

頭を下げて、幼稚園に行つてくれと頼まねばならぬ時が来るかもしれない。その時、「どうしても行かない。あの時、約束したから」と言われると、どうしようもないということを思いました。それで、かろうじて、その言葉を口の中に飲み込みました。私は、込み上げてくるイライラを抑えて、娘に優しく、「どうして幼稚園に行かないの。あれだけ楽しみにしていたのに」と尋ねました。すると、「お友達がいらないから」との答えが返つてきました。答えの中に、解決への道が示されていても、こちらの心が開かれていなければ、それに気づきません。

娘は、本当は幼稚園に行きたいのに、行きたくないと言っている。どうすれば娘の心が助かるのだろうか。祈るような気持ちで考えました。

そして娘に、「幼稚園には行かなくてもいいから、入り口まで行ってみようか」と言いました。すると、「入口までなら行ってもいい」と言います。早速自転車に乗せて、入り口まで連れていきました。「教室には入らなくてもいいから、教室の入り口まで行ってみようか」と言いますと、「教室の入り口までなら行ってもいい」と言いますので、教室の入り口まで連れていきました。すると、先生が出てきて、「喜久代ちゃんおはよう、よく来たね。みんな待ってるよ。一緒に遊びましょう」と言って、手を引いて中に連れていってくれました。

私は、幼稚園から帰り、しばらく神様にお祈りをしていました。すると、ふと気づかされることがありました。「娘は、友達がいらないから

と言っていた。先生がみんなとよく遊んでいますよと、おっしゃったので気づかなかったが、本当は友達を作るのに大変だったのではなからうか」ということでした。といいますのは、妻は朝、仕事が忙しいので、娘を幼稚園に連れていくのは、始まるギリギリの時間で、その頃にはみんな登園していて、それぞれにお友達と遊んでおり、その輪の中に入るのが大変なのではなからうかと気づきました。

そこで妻と娘に、「早めに幼稚園に行けば、友達ができるのではないか」と話し、娘も納得し、次の日は一番になるように登園しました。一番に登園していますと、後から来る子に、「遊ぼう」と声を掛ければ、すぐにお友達になれます。そうして問題に明かりが見え出した頃、幼

幼稚園で、園児のお母さんから、「うちの子も去年そうでしたのよ。同じクラスだから毎日お迎えに行つてあげます」と言われ、それからはその子と一緒に、喜んで幼稚園に行くようになりました。そして、次々とお友達も増えていきました。

私たちは、何か問題が起ると、自分の尺度でもつて、善い悪いを決めて、説教をしたり、責めたりしますが、相手の言うことにじつと耳を傾けたり、相手の心になつて一緒に問題を考えたり、そのことをお祈りすることにはなりにくいようです。私も、子どもの登園拒否に対して、親の権威でもつて押さえつけようとしたり、一般的な判断、常識的な判断によつて、子どもを責めようしました。そういう姿勢からは、

決して良いものは生まれてきません。

金光教の教主のお歌に、「ちちははも子どもとともに生まれたり育たねばならぬ子もちははも」とありますが、親として、どこまでも子どもの心、命の叫びに目を向け、共に祈り、共に問題に取り組んでいくことが大切であると、改めて教えさせられた出来事でした。



《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内6」

第1回

おはようございます。かんべむさしと申します。職業は作家でございまして、日本文藝家協会と、日本SF作家クラブの会員になっております。今朝から週1回、『かんべむさしの金光教案内』と題しまして、5週にわたって、お話をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

そこでまず、第1回目の今朝は、金光教の教祖さんのお話をさせていただきますが、教祖さんは幕末時代の備中大谷、いまの岡山県浅口市金光町で、農業をしておられた方です。

子どもの頃から神仏に参るのが好きで、温和で正直な人でしたが、不幸や不運にもたびたび見舞われていました。子どもを3人も亡くす。自分も大病をする。農家にとっては家族同然の牛が2頭も死ぬ。そんな苦難をとおして信心を進められるうちに、神様とお話をさせてもらえるようになられたんですね。

そして、神様から命じられた厳しい修行を経た結果、神様御自身のお名前は、「天地金乃神」であると教えられ、教祖さんには、「生神金光大神」、大神は大きな神と書きますが、そういう神としての名前を与えられました。

ただしこの生神は、信心の境地が進んで、「ここに神が生まれる」「生まれた」という意味だそうで、教祖さんは、「誰でも信心を進めれば

そうなりますよ」と教えておられます。

またその間、教祖さんは多くの人々からの頼みを受けて、それぞれの願いの成就じゅうじゆや悩み事の解決を神様に祈って、かなえてもらっておられました。最初は農業をしながらでしたが、のちには神様からの頼みによって、それに専念され、明治16年に亡くなられるまで大方25年間、人助けに励まれたんですね。

人の願いを神に取り次いでかなえてもらい、神の思いを人に取り次いで、より良い生き方を教えていく。それでこれを、「取次とりつぎ」と申しまして、現在も全国各地の教会で実行されている、金光教の根本になっている働きです。

実は私は、40代の後半になってから金光教に御縁を頂いたんですが、まったく何も知らなか

った者が、教典や教祖さんの伝記を初めて読んで、どう感じたか。その実感を申しますと、「親切で寛容で、穏やかな優しい宗教だなあ」ということでした。

金光教は他の宗教を否定せず、共存共栄を良しとしてますし、賽銭やお供えに義務も強制もありません。それから教会の先生は、外に勧誘に出たりはせず、内に座り続けて、どうぞ、助けを必要とする人をお引き寄せくださいと、常に神様に祈っておられます。そしてそれらは全て、教祖さんの親切な取次とりつぎぶりと、寛容な姿勢をお手本にしたものでして、幕末以来、現在に至るまで、どこの教会もそれを守り続けておられるんですね。

また、金光教の教典は、教祖さんのお言葉や、

大勢の信者さんの助けてもらえたお話を集めた、分厚いエピソード集になっておりまして、私は、その穏やかで優しい雰囲気に安心ができて、心を開かせてもらえました。

例えば、「天地金乃神は人間の親神おやがみである。

かわいいわが子を、どうして難儀に遭わせなさるであろうか。わが子をもつて納得するがよい」という教えがありまして。

これはどういうことを言っておられるのかと申しますと、人生の道筋でいろいろの難儀が起きてくるのは、元をたどれば、人間の側がその原因を作っているのであって、神様がそうしておられるわけではない。だから、誰でもお詫びと改まりの心でお願いをしていけば、神様は親として助けてくださる。

また、神様は時には厳しい面も示されるが、それは決して罰ばちを当てておられるのではない。

例えば、普段は優しい親でも、子どものことを思えば、厳しくしつけなければならぬこともあるだろう。それと同じことで、以後は、氣をつけて改めるようにと、助けて育てるために、叱って教えてくださっているのだ。

そういう意味の教えですが、私も、子どもを3人育ててきた身ですから、「ああ。なるほどなあ」と、分かるような氣になりました。

ちなみに、神は親で、人間はその子どもであるというこの教えは、聞き方によっては、通俗的な、「見立て」に過ぎないようにも思えますが、実は神と人との関係の本質を表現したことのようにです。つまり、人間は生まれる時、神様

の^{みたま}霊を分け与えてもらってきているので、肉体の親は両親だけど、本体、タマシイ、霊の親は神様なのだということですね。

そして金光教も、単に岡山の片田舎で生まれただけの民間宗教ではなく、どの地方、どの国でも通用する、時代を超えた普遍性を持つ宗教だと、私は感じました。その証拠に教祖さんは、こうも教えておられます。

「神は目には見えないが、そこらあたりいっぱいにおられるので、我々は神の中を分けて通っているようなものである」

つまり、神はこの宇宙に遍く満ちわたっているのだと言っておられたわけで、これも本質の表現ですね。実際、古今東西のいくつもの宗教が、神とは遍満^{へんまん}に存在する大いなる意思のよう

なものなのだと、そう教えてますからね。

はい。それでは来週は、昔の大阪で教会を開かれた、福嶋^{ふくしま}儀兵衛^{ぎへいゑ}という先生のお話をさせていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内6」

第2回

おはようございます。『かんべむさしの金光教案内』、2回目の今朝は、明治時代に大阪市の北区で教会を開かれた、福嶋儀兵衛ふくしまへえという先生のお話をさせていただきます。

福嶋先生は、幕末にはまだ少し間がある天保てんぽう年間に、大和の国、今の奈良県で生まれられました。そして、13歳の時、大阪に出てこられて、商売の中心地として知られた、「船場せんば」で、金物屋に奉公されました。それで、10年余りが経った時には、店の商売をほとんど任されるようになって、さらにその先では、その御主人の

長女と結婚して、その金物屋を引き継がれたんです。

実は私、長年の上方落語ファンでして、昔の大阪の奉公人の仕事ぶりなんか聞き覚えてましたので、金光教の関連書籍で、この福嶋先生のお話を読んだ時、本当に興味深くて、一遍で覚えてしまいました。

大和から出てきて、船場で丁稚奉公ていぢほうこうから始め、先では御主人のお嬢さんと結婚させてもらって、店を継ぐ。真面目に働く。仕事もできる人だった証拠でして、それこそ落語に出てくる忠実な番頭さんのように思えたんですね。

この福嶋先生、ある時、店のお客さんから、金光様の教えを聞かされました。元号が慶応から明治に変わる年のことですが、その頃すでに、

備中^{びっちゅう} 大谷の教祖さんの教えが、大阪にも広ま
つてきてたんですね。

それで福嶋先生、良い教えだと感銘を受けて、
早くも翌年の明治2年、人に連れていつてもら
って、教祖さんのもとへ参られました。

そしてその時、その教えをいろいろ親切に聞
かせていただけたんですが、その中に、あらま
しこういうものがありました。

「神様を拝礼するのに、ここでは別に決まり
はない。実意丁寧正直、真^{まこと}一心が要である。
まず、日々生きさせてもらっているお礼を申し、
次に、お互い凡夫^{ぼんぷ}、凡夫というのは普通の平凡
な人間ということですが、その凡夫の身ゆえ、
知らず知らず、神様に対してご無礼、お粗末、
お気障りなことをしているだろうから、そのお

詫びを申し上げる。そしてそれが済んだら、自
分の身の上のことや暮らしのことなど、何でも
実意をもってお願いさせてもらえば、それでよ
いのである」

それで私、金光教の教典で初めてこの教えに
接した時、非常に安心しておりました。

拝むのに、別に決まりはない。とにかく真の
心で、実意を込めて丁寧に正直に、御礼とお詫
びとお願いをすれば、それで信心になっている
のだという、分かりやすく、穏やかで、「あ
あ、それなら自分にもできそうだな」とも感じ
させてもらえる。

もちろん、その神様とはどんな存在なのだと
か、簡単そうに思える教えでも奥は深いんだぞ
とか、先へ進めば難しくなるのかもしれない

が、まずは、初心者にも入りやすい教えだなど
思ったわけです。実意、丁寧、正直、真の心。

そして御礼、お詫び、お願い。実際、これが金
光教の基本なんです。

さて、福嶋儀兵衛先生ですが、その後も商売
を続けながら、夫婦で信心を進められました。

その間、それまで、2回も難産で苦しんできた
奥さんが安産させてもらえたり、長男さんの重
病を助けてもらえたり、神様の力の現れ、金光
教ではそれを、「おかげ」と言っておりますが、
それをまざまざと体験されました。

それで、そのことが親戚や近所の人たちの評
判になって、福嶋先生がなさる神様の話に聞き
入ったり、「祈ってください。願ってください」
と頼みにくる人が増えていきました。そこで明

治10年、商売は長男さんに譲って、布教に専念
しようと決められたんですね。

そして船場から曾根崎に移られて、明治33年
には、この宗教が金光教として独立しましたの
で、金光教真砂教会の初代教会長になられたわ
けです。

真砂は、真実の真に砂と書く町名ですが、今
の北区西天満、裁判所の合同庁舎がある辺りは、
以前は真砂町とか絹笠町とか老松町とか、美し
い町名がありましたね。現在も画廊や古美術や、
お茶の道具を扱う古くからの店が並んでいる一
画があつて、真砂教会はそのすぐそばにある、
落ち着いた雰囲気建物です。

また福嶋儀兵衛先生の長女は、両親の感化を
受けて、同じく信心を進めておられました、

明治17年、軍人さんと結婚されました。勤務先

とうございました。

が難波^{なんば}憲兵^{けんべい}屯所^{とんしよ}という、いかにも明治時代らしい名称ですが、その御主人は最初は、別に信心する気はなかったんだそうです。

しかし、奥さんやそのご両親の影響で、次第にその道に心を惹かれて、信心の道に入られ、ついには憲兵をやめて、明治20年に同じ北区で別の教会、扇^{おうぎ}町教会を新たに開かれました。

福嶋儀兵衛先生ご夫婦も、娘さん夫婦も教会を開かれて、どちらも現在まで、百何十年間続いております。つまりそれだけ、助かった人、助けてもらえた人が多かったということですね。

それでは来週は、金光教の教典に出てくる、信者さんのお話をさせていただきます。ありが

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内6」

第3回

おはようございます。『かんべむさしの金光教案内』、3回目の今朝は、教典に出てくる大勢の信者さんの中から、女性と男性、2人を選んでお話をさせていただきます。どちらも私の好きな、金光教にぐっと親しみを感じさせてもらえたエピソードです。

明治時代の話ですが、ある日、教祖さんから教えを受けて、教会を開かれていた先生が、その教祖さんのもとに参拝されました。そして、そこへ一人の女性が参ってきたんですけど、顔を隠すように頭巾を深くかぶって、それを脱が

ないまま、神様を拝んでいるんですね。それでその先生が怪訝けげんに思っていましたら、教祖さんが教えてくださいました。

「このお方は、もとは岡山で遊女をしていた人じゃ。評判の美人で、玉島たましまの材木屋の主人にひかされて、『玉島に来てからは、毎日参ってこれます』と、喜んでおられる」

遊女とは、郭くるわ、つまり遊郭で働く女性のことで、玉島は教祖さんのおられた、備中大谷びつちゅうの近くです。そして、「ひかされる」というのは、最屑ひいきの客が遊女の抱えてる借金を清算してくれて、祝いの席も設けてくれて、自分のもとに引き取ってくれるという意味です。このお話では、その材木屋の主人と結婚したんですね。ところが教祖さんは、さらに言われました。

「神様が仰せられるには、この者は長らくの勤めで、体中が毒である。しかし、それを取ってやろうと思えば命が終わる。体に傷をつけて取れば、命は助かるが、それでは亭主が捨てるであろう。だから子どもを授けてやる。子どもが出来れば亭主は捨てない」

つまり遊女という仕事柄、悪い病気を移されて、体中にその毒が回ってたんですね。それで神様は、その毒を取り払い、同時に死なずに済み、亭主からも捨てられずに済むよう、配慮を尽くした助け方をされた。

その仰せがあった翌年、元気な男の子が生まれて亭主が大喜びしてから、彼女の顔に出来物ができだして、それがどんどん増えたんです。女性として、とても人前には出られない顔にな

って、それで頭巾をかぶってたんですが、神様は出来物の膿うみを出すという形で、毒を取ってくださったんでしょね。

それで私、これを読んだ時、その助け方に、「優しい神様だな。情のある、いい話だなあ」と思いました。と同時に、「なるほど。助けてもらうには、時間のかかる問題もあるんだな」とも思いました。人間一人を死なさずに毒を取るためには、神様も手間と時間をかけざるをえないということなんでしょうね。

ですから、この女性がその後どうなったかは載っていませんでしたが、長い年月がかかったにせよ、もとのきれいな顔に戻ったんじゃないでしょうか。そう思いたいですね。

さて、二人目は男性の信者さんのお話でして、

ある時、田圃^{たんぼ}を作っている人が、「苗代^{なわしろ}にひき
がえるが入って、卵を産んで困ります」と、お
願いに来ました。そしたら、それに対して教祖
さんはどう答えられたか。

「よそではそれを封じるというが、うちでは
封じない。かえるに、畦^{あぜ}で遊んでもらうように
すればよい。うちの田に入らないようにすれば、
よその田に入るから」

江戸時代も明治になってからも、備前^{びぜん}・備
中^{ちゅう}・備後^{びんご}、今の岡山県や広島県には、田園地
帯が多かったので、こんなお願いをするお百姓
さんもおられたわけですね。「封じる」という
のは、行者さんか誰かに頼んで、まじないをし
てもらおうということでしょう。

しかし教祖さんは、「うちでは封じない」と

言われた。自分の田圃に入らないようにと封じ
たら、かえるはよその田圃に入る。誰の田圃に
入っても困るのだから、畦、畦道の畦ですね、
そこで遊んでもらえばいいのだと。

それで私、初めてこの話を読んだ時、「これ
は以前テレビでやっていた、『まんが日本昔ば
なし』の世界やな」と、うれしくなりました。
自然という環境の中で、人間も他の生き物たち
も、共に生きているのだからという、実に穏や
かな雰囲気のお話でした。

ですからこの、「共生」、神様がつくられた
天地の中で、全ての生き物や、草や木までもが
共に生きているのだという物の見方は、金光教
のひとつの土台になっております。

そして私は、大阪市内にある金光教玉水教会^{たまみず}

という、明治時代にできた教会に通わせていた
だいておりますが、その初代教会長の教えにも、
同じような話があります。

大阪近郊で枇杷畑を作っている信者さんが、
野ウサギが出てきて食い荒らすので、それを止
めてほしいとお願いに来ました。それに対して
初代教会長は、こう教えられました。

「神様は野ウサギたちの食べしろも含めて、
枇杷を育ててくださっている。だから、あちこ
ちの木を食い荒らされて困るのなら、4本か5
本かの木を決めて、これはおまえたちにやるか
ら、他の木は荒らさんようにと願いなさい。私
もそう御祈念させていただくから」

そしてその後、実際にそうなったそうで、
優しく情のある光景が私の心に残って、金光

教がさらに好きになったお話です。

それでは来週は、元は明治時代の大阪で、弁
護士として活躍されていた、善積順蔵よしづみじゆんざうという
先生のお話をさせていただきます。ありがとうございます。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内6」

第4回

おはようございます。『かんべむさしの金光教案内』、4回目の今朝は、明治時代の大阪で、元は自由民権論の闘士で、弁護士としても活躍されていた、善積順藏よしづみじゅんざうという先生のお話をさせていただきます。

金光教の中では、教典や教祖さんの伝記と共に、人助けに励まれた先生方のお話をまとめた本が何冊も出ておりまして、私、善積先生のこととはその一冊で知ったんです。そしたらまあ、その内容や雰囲気といい、続々と出てくる当時の有名人といい、無茶苦茶におもしろくて、興

奮しておりますた。

というのが、まず書き出しが、「余が初めて世の中に出たのは明治7年、土佐の立志社に入つて法律の研究が初めで、ルソーの民約論などに心酔したものであつた」と、こうですからね。

「間もなく大阪に上つて同志の二、三と盛んに民権自由論をならして、公開演説などをやつて世の中を騒がした」

つまり明治時代の初期には、薩摩さつや長州ちやうしゅうのいわゆる、「藩閥」はんぱつ政治に対して、自由民権運動が盛んになり、大阪はその中心地だったんです。ですから演説会は、「一步当局攻撃にわたらんか、ただちに中止解散、拘束、時には聴衆と警察官吏かんりとの争闘が起こる」という。会場内で乱闘が始まったんでしょね。

おまけに明治10年代には、藩閥関係者による大きな汚職事件も起きてましたから、自由民権派は新聞を発行して糾弾する。善積先生も大阪の新聞社に入って奮闘されるんですが、その時代の体験談には、中江兆民とか、植木枝盛とか、高校の日本史の教科書に出てきたような人が続々と登場する。大正時代に首相になる原敬なんか、「原敬君」と親しげな呼び方で、それとは別に宗教方面では、「新島襄君とも深く交わった」と、こうですわ。

ただし、その後、弁護士になって活躍され、出身地の兵庫県で県会副議長に選ばれたりもして、「余の得意時代であったため、金光教の如きはほとんど眼中になかった」と言っておられます。

一方その頃、当時の金光教で大阪教会を開かれた、初代白神新一郎という徳の高い先生が、世の中を惑わすという疑いで、検挙されたことがあります。それで善積先生が、その弁護を頼まれたんですが、先生いわくは、

「あくまで弁明して無罪にせんと、一生懸命に教理を研究した。今から思えばこの時既に、神の御綱がかかったのであった」

つまり、その時、金光教に先の御縁を頂いていたということでしょうね。ただし、白神先生と面識ができ、裁判にも勝ちましたが、まだ信者になる気はありませんでした。

ところが実は、この善積先生の奥さんが、娘時分から大阪教会に通っておられた方でして。最初友達に、「どんな願いでもかなえてもらえ

る」と聞かされた時には、欲の深い人が信心する神様のように思い、しかし同時に、「便利な神様だ」とも感じられたそうで。「便利な神様」には、それを読んだ時、私は思わず笑っておりました。

それで結婚後も信心を続け、折々、ご主人にもそれを勧めていたんですけど、奥さんいわくは、「本職が弁護士で、全てが理屈っぽくて」とても説得できない。しかし奥さんの信心に反対はせず、金光教で言う、「おかげ」、願いの成就や難儀の解決の実例については、これも仕事柄でしょうか、「事実ほど有力な証拠はない」とは言っておられた。

そんなわけで明治37年、ついに奥さんの勧めに従って、一緒に御本部に参拝されたんですね。

そしてその時、とうに亡くなっておられた教祖さんのお墓にも参られたんですが、その時のことをこう言っておられます。

「実に不思議じゃ。額ぬかずいてお礼を申し上げていると、何物かぼっとして霞かすみの如く余の眼に映じたと思う瞬間、あたかも電力にでも触れたかの如く、有難いようにも思うが、心気は遠く遠くなっていき、やがて一種の想いが湧いて滾々こんこんたる泉となつて、流れてしまうような感じがする」

そしてその後、これまでの人生についての反省とか後悔とか、いろんな想いが次から次へと浮かんできたそうで、「これが余の信仰の第一動機であつた」と言っておられます。

つまり、それまでに弁護士として金光教の教

えは研究されてたし、奥さんは熱心な信者だった。そこにこの靈妙な体験が加わって、それこそ、「事実ほど有力な証拠はない」ということになったんでしょね。信者になられて、奥さんと共に信心を進められたんです。

そしてその後、結核性腎炎けっかくせいじんえんになつて、医者にも見放されたんですが、夫婦そろって御本部で祈り続けましたら、快方に向かい出して、ついには全快しました。そこで善積先生、その助けももらった大恩に報いるためにと、同じく夫婦そろって金光教の教師になられ、明治40年には、現在の韓国のソウルにあった教会の、教会長を拝命されたんです。

とにかくまあ、文章も内容も実に明治時代風でして。当時の大阪が自由民権論で沸き返る街

でもあった様子がおもしろかったし、「金光教の如きは」と言つてた人の、生き方の激変という点でも興味深くて、ちよつと興奮気味に伝えさせていただきました。

それでは来週は、私自身が金光教に御縁を頂いた、その時のお話をさせていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内6」

第5回

おはようございます。『かんべむさしの金光教案内』、最終回の今朝は、私自身が、どんなきっかけで金光教の信奉者になったのか、そのお話をさせていただきます。

まず、私が金光教玉水教会たまみづという、大阪市西区にある、明治38年に出来た教会に正式に通いだしたのは、40代の後半になってからです。それまでは宗教には何の関係もない、平均的な日本人の一人だったんです。

略歴を申しますと、学校を出て広告代理店に6年間勤めた後、脱サラして作家になりました。

そしてその勤めてた広告代理店が、偶然、玉水教会のすぐ近くにありましたので、木造の古い大きな建物だけは見て、知っておりました。

一方、広告の仕事を選んだ時も、脱サラする時も、私は自分で考え、自分で決めて、実行してきておりました。父親が早くに亡くなり、また家庭内の事情もあって、「大学を出してもらったら、その先、自分は全て一人でやっていかねければならんのだな」と、高校の頃から強く思っていたからです。

しかし同時に、正味の私は心配性の恐がりで、本当に気が弱い人間です。なのに人には頼らず、全て自分一人でと覚悟してるんですから、心の底には常に不安がある。それを和らげるため、サラリーマン時代も、作家になってからも、安

心・自己実現・願望達成法の本などは、よく読んでおりました。

そして、漫画家のサトウサンペイさんが書かれた、『ドタンバの神頼み』という本も読ませてもらいましたら、書き出し部分に、建物だけを見て、知ってた教会が出てきたので、びっくりしました。私はそこで初めて、「金光教」という宗教名、「玉水」という教会名を知ったんです。

とにかくそんなわけで、それらの本を折々読み返しながら、仕事面でも、生活面でも、自分の考えや判断で対処してきてたんですが、40代になってから、それだけでは解決できない問題が起きてきました。

簡単に言いますと、世間一般の読書離れが進

んで、本というものが売れなくなり出したこと。母親が高齢化して、心身の老化が目立ち出したこと。しかも身内に揉め事があって、それがどんどんひどくなってきたこと。

どれもこれも、私一人の力で解決できる問題ではありませんので、精神的に追い詰められて、私は、ノイローゼみたいになりました。

そして、『ドタンバの神頼み』を改めて読み直し、「ひよつとしてこの宗教、この教会が、今のこの苦境を、何とかしてくれるのではないか」と、そう思ったんです。

つまり、それまでの「全て自分の力」というやり方が、ついに通用しなくなつて、「神様に頼る」という、全く別の思いが、初めて生まれてきたんですね。

ただし、先程申しましたように心配性ですから、すぐさま信奉者になるということは、できませんでした。玉水教会は大きな教会で、誰でも自由に出入りできますから、どんな様子なのか、まず偵察に行き出したんです。

そして、それが断続的に何と2年に及んだんですが、教会長や所属しておられる先生方が、よく2年間も「知らん顔」をして、良い意味で「放っておいて」くださったものだと思います。途中で何か言われてたら、私は逃げてたに違いありませんからね。

それでその間、金光教の教典や教祖さんの伝記も読ませていただいて、温和で寛容な教えであること、他の宗教を否定せず、賽銭やお供えに義務も強制もないこと、そして何よりも、人

から神様への「願い」が土台になっていることなどを確認させてもらいました。

その結果、47歳の時、決心して、自分の名前や職業や、重荷になってる問題などを先生にお話しさせていただきまして。以来今日^{こんにち}まで、その時々^{とき}の願いの実現や難儀の解決を、神様にお届けさせてもらってきけるわけです。

そして現在、私は後期高齢者になっておりますが、それだけの年月、教会に通ってきて、心が進んだのかというと、自分でも情けないんですけど、そうではありません。

性格気質や仕事柄もあって、教えでも何でも、「頭」で理解はするけど、本当には分かってない。身に付いてない。この放送でも、参考書籍を頭で読んで、作家の「勘」でまとめる部分

が大きいので、「底の浅いことをしてるなあ」と、自分で思ったりしてるんです。

実際、神様を心の底から信じるというのは本当に難しいことで、私はいまだに迷ったり、心配したり、うろたえたりしております。とはいえ、金光教という幅の広い道を歩かせてもらってる中で、右に寄ったり左に寄ったり、ふらついてはおりますが、歩くのをやめようとか、この道からそれて他の道に行こうとか、それは思ったことはありません。

ひとつの言い方をすれば、「信じてる」とまでは言えなくても、金光教を「信用してる」ということは、言えるだろうと思います。

また、前に教会でもらった日めくりカレンダーには、「何でも自分の力でできますか。できな

いから祈るのです」という言葉が載ってましたが、それは「本当にそのとおりだなあ」と、実感しております。そうなんです。できないから、祈ってるんです。

はい。というわけで、『かんべむさしの金光教案内』、5回にわたってお話をさせていただきました。機会がございましたら、またいつかお話を。ありがとうございました。



金光教本部 ラジオ放送係

住 所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電 話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 木曜日 あさ4時35分

放送センターHP

「こころで聴く

おはなし」



「こころで

聴くおはなし

Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。